

論語は幸せの道しるべ

私は、職業に就き、組織経営にあたらせていただくと
き、自分自身の未熟さに気づき、教育学はもとより、学
指導要領を熟読するとともに、心理学や脳科学、経営学
などを紐解きました。と、同時に、歴史小説が好きで、
その偉人は、なぜ偉人たりえたのか、考えてみました。
そこには、生き方考え方の学びがあり、そこを私も稚拙
ながら学びはじめると、前述の最新の科学的所見と同じ
ような内容が多い事に驚いたことがあります。このよう
な気づいたことなどを私感と共に記していこうと思いま
す。今は亡き私の論語の師は、「学術的に採り入れただけ
では力にはならない、私感をもて始めて実用、活用で
きる」と言われました。浅学非才不肖の私は、学術的な
探求をしたわけではなく、仕事や生活に少しでも実用、
活用できればと学んだ稚拙な考えで間違いない等あるかと思
います。皆様のお導きをよろしく願います。

まず、『論語』や『中庸』『大学』などを学び、気づい
たことは、人間関係つまりやさしさや温もり、思いやり
こそ「本」だということです。それを、第一回に記させ
ていただきました。『論語』でいえば、仁或いは恕です。
『中庸』や『大学』でいえば、誠です。

次に、様々な困難や憂いを克服しながら生きていく生
き方考え方を磨くには、「学ぶ」と「習う」ということ
です。言葉を知るだけでなく、身を通してやってみて始め
て自分のものになるということです。或いは行動化する
ことです。知行合一ともいいます。これも、第二回へ記
したところです。

今回からは、どんなに社会が変化しようとも実用活用
できる生き方考え方について、私なりに考えた人間の発
達に沿って記していこうと思います。

- 一、愛着形成期
- 二、身の周りの生活からの自立期
- 三、精神的自立期
- 四、経済的自立期
- 五、家族や諸組織のリーダーとなる期
- 六、生涯にわたり学ぶ

これらは、各期で、自ら学ぶことで磨かれるというこ
とです。だから、成長し続ける事こそ、命であり、次代
へ引き渡すことができるのだと僭越ながら考えます。
今回は、三の精神的自立期のことを私なりに記そうと
思います。

「**是れ聞なり、達に非ざるなり**」
【顔淵】

この意味を一言でいうと、

外聞ではなく、本質こそ大事

と、「**聞**」で、これを指摘したいものです。

もともとこの章句の現代訳では、

（弟子が先生に尋ねた「人として生まれたからには達人
になりたいものです。達人とはどういう人を用うのでし
ようか。仕事でも評判がよく、家庭生活でも評判がいい
人のことでしょうか」と。）

すると先生が答えられた。「それは聞という。達では
ない。達人とは、うわべを飾らず正直な人を用う。つま
り、義を好み、人に接するにその人の言からその思いを
察し、顔色を観てわが行動の適否を知り行う人を用う。
しかも、謙虚で驕り高ぶらない人を用う。こういう人は、
仕事でもうまくいき、家庭でもいまくいく」と。）

結局、自分の向かい目指す処が、人からは見えな
いかもしれないけど仁や正義であり、外からの評判を高める
処なのか、人の言や顔色からその奥にあるものを察する
ことのできる本質的徳や能力を高めていく処なのか、こ
の違にあると考えます。後者を目指し身に付けば、自
ずと前者がよくなる場合もありますが、前者を目指して
後者が身に付くことはないと思います。更に、前者は、
理が自分の外にあるので自分では如何ともし難く飾るば
かりではしんどくなる場合が多いと思います。また、

「**其の為す所を視、其の由る所を觀、**

其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦

さんや」
【為政】

という章句があります。これは、

いくら表面を飾っても内面の人柄は隠せ

ませんよ

と教えています。全くその通りだと思います。己を戒
め慎まなければ、と感じ入るばかりです。

でも、逆に、人からどんなに思われているの不安で
心配になる時がありますが、そんなとき、しっかり自分
を保つことができる章句があります。それは、

「**内に省みて疚しからざれば夫れ何をか**

憂え何をか懼れん」
【顔淵】

です。これは、

自分に疚しいところが無ければ心配する

ことは無いですよ。

と励ましているのです。

結局、いい生き方考え方をするため学び続け、何歳で
も学び続け、心を成長し続けることが幸せにつながるの
かもしれない。

皆様、ともに学び合いましょ。お導きお願いします。